



国際委員会だより 【第21回】

Message from International committee

実践的海外プロジェクト⑧

～ベテラン技術者の海外業務への取り組み～

国際委員会

磯部 猛也 | ISOBE Takeya

建設コンサルタンツ協会の「海外市場対応能力の支援」の一環として、国際委員会から海外業務を紹介する記事を継続して掲載しています。これまでは海外業務に取り組んでいる若手技術者を中心にインタビューを行ってきましたが、今回から長く海外業務を経験しているベテラン技術者に、プロジェクト運営上の留意点や後進へのアドバイス等を聞いていきます。

インタビュー対象者プロフィール

対象者：森下甲子弘 (MORISHITA Kaneshiro)
所属：建設技研インターナショナル
専門分野：河川計画
経験年数：国内14年、海外25年
海外業務実施国：フィリピン、ラオス、カンボジア、マレーシア、インドネシア、イラン、セネガル、マラウイ等



図1 セフィードルード川流域図

インタビュー内容

Q1. ご紹介いただくプロジェクトの概要を教えてください。

A1. プロジェクトの概要は以下のとおりです。
プロジェクト名：イラン・イスラム共和国セフィードルード川流域総合水資源管理調査
発注機関名：独立行政法人 国際協力機構
実施期間：2007年7月～2010年9月
(期間：3年3ヵ月)

カウンターパート機関：同国エネルギー省水資源管理公社

Q2. 対象となった河川流域の概要と課題について教えてください。

A2. セフィードルード川は、イランの北西部を流れ、カスピ海に注ぐイラン有数の大河川です。流域面積は59,090km²で、ほぼ九州と四国の面積に相当しますが、流域内人口は470万人で九州と四国の人口の30%程度です。当流域の水資源は、イランの中でも比較的豊富ですが、年間降水量は346mmと我が国平均の20%程度に過ぎず、まさに乾燥・半乾燥地帯の典型的な流域です。流域の行政単位は8州に分かれ、それぞれの州は民族的にも異なるため、あたかも独立国家のように振舞い、限られたセフィードルード川流域の水資源を個別単独に開発するためのダム建設を計画しています。流域全体を管理していくという視点がなく、将来の水資源の枯渇が危惧されています。さらに最下流部のギラン州は流域内唯一の稲作地帯であり、経済的に豊かであるため、既に上流7州との水争いが発生していました。

Q3. そのような課題に対して、どのような提案をされたのですか。

A3. まず、各州間のコンフリクト(対立)の背景を把握し、水ユーザーや水管理機関といったステークホルダーの参加のもとにワークショップを各州で開催し、対立点の整理と対処方法の合意プロセスを提案しました。並行して、州相互の計画調整に合理的判断を与えるため、現在および将来の水需要と長期間の水文資料に基づく流域モデルを構築し、将来必要な水資源開発のための施設計画とモニタリング計画を併せて提案しました。実際の計画調整と合意形成の場として、河川流域協議会(RBO)の設立とコンフリクト調整メカニズムを提案しました。各州間のコンフリクトを調整していく協議プロセスは、長い年月を経て解消に向かうものです。本プロジェクトは、その端緒を示したものと見え、一昨年RBOが結成されたと聞いています。

Q4. プロジェクトを運営する上で、通常どのような点に留意されていますか。

A4. 本プロジェクトは、建設技研インターナショナル単独で受注・実施したものです。通常は数社で共同企業体を結成し、お互いの専門分野の長所を持ち寄って実施します。こうした場合、幹事会社の団長や副団長は、プロジェクトの明確な工程管理のもと、他社の技術者と十分な意思疎通を図りながらプロジェクトを進めていく必要があります。まずは団内の意思統一が重要です。さらに、プロジェクトを進めていくに当たって、一番の難関は相手国政府のカウンターパート機関との合意形成とプロジェクトに対して彼らの協力・支援を受けることです。風土・宗教の異なる相手側との技術協議を根気強く行うことにより、当初は日本の技術をあまり重要視していなかった彼らの認識を日本の技術者集団への高い信頼へと改めることができました。

Q5. 今後海外業務に取り組もうとする後進へのアドバ

イスを、お願いします。

A5. 私はちょうど2000年頃から、さまざまなプロジェクトのマネージャーを引き受けてきました。これまでの経験から強く感じることは、相手国政府機関の人たちとの相互理解、共通認識に基づいた調査計画作業、互いの合意のもとでの基本計画の立案といったプロセスを経ることで、風土と宗教の違いを超えて、実り豊かな成果に結び付くということです。皆さんも、物怖じせず相手国政府機関の人たちの生活習慣なども含めて何でも見てやろうという大いなる好奇心を持つことが大事です。また、イランの技術レベルはかなり高く、彼らとの技術的な議論は非常に楽しいものでした。そのような議論や現地調査での協働を通して、互いにプロジェクトの成果を築き上げていくということを心掛けることをアドバイスします。一先輩として、実り豊かな海外業務にチャレンジしてもらえればと思います。

まとめ

経験に裏打ちされたベテラン技術者の言葉には、これから海外業務に取り組もうとしている企業あるいは若手技術者にとって非常に示唆に富んだものがあります。建設コンサルタントとして、高い技術サービスを提供すること、またそれにも増して関係者と良好な関係を構築するために、コミュニケーション能力を鍛えることが重要であると言えます。また、このようなベテラン技術者の実経験に基づくプロジェクトリーダーとしてのノウハウを後進にどのように引き継いでいくかは、既に海外に展開している企業にとっても重要な課題だろうと思います。



写真1 イランの地方都市アルデビルでの会議(立って説明しているのが森下氏)



写真2 カスピ海沿岸の観光地マスレ(左から二人目が森下氏)